

「流れのほとり」

詩編 1編1節～6節

説教 久保田拓志 先生

「神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道にとどまらず、傲慢な者と共に座らず、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」(1節～2節)とは、人間と神様との本来の関係を指し示しています。主の教え、主のいましめを、喜び、愛し、昼も夜も一日中、それを口ずさむ人。その人は、流れのほとりに植えられた木のようにと詩人は詠います。そして、「いかに幸いなことか」と詩人は、そのような人を祝福します。いや、そこには祝福以上の祝福、歓喜に近いような喜びの極致が詠われているといってもよいかもしれません。

詩編は、イエス・キリストの祈禱書とも呼ばれることがあります。また、甦られたイエス・キリストは、弟子たちに現れて、「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。」(ルカによる福音書24章44節)と言われました。ですから、詩編の御言葉を声に出して読む時、私たちは、神様の御心、イエス・キリストの御心に触れることが許されているといつてよいと思います。

マタイによる福音書5章には、山に登られたイエス・キリストの、弟子たちへの祝福の御言葉が書き連ねられています。イエス・キリストが幸いであると祝福された弟子たちの生き方は、神様が与えられた時が巡り来るとき、必ず実を結ぶ。だから、あなたも神に祝福された命の道へと進みなさい、あなたの重荷は、私が必ず負う、というイエス・キリストの約束が、この「幸いである」という祝福の御言葉には込められています。

「彼は、風に吹き飛ばされるもみ殻、裁きに堪えず、神に従う人の集いに耐えない。神に従う人の道を主は知っていてくださる。神に逆らう者の道は滅びに至る。」(4節～6節)

イエス・キリストは、十字架につけられる直前、弟子たちに向かって、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない」(ヨハネによる福音書14章6節)とお語りになりました。

「神に従う人の道を主は知っていてくださる。神に逆らう者の道は滅びに至る。」というこの御言葉をイエス・キリストの口を通して聴くとき、この御言葉の響きの中に、道そのものであるイエス・キリストが、神に逆らう者である私たちの行く手に立ちただかったださった、あの十字架上の悲しみと苦しみが、伝わってきます。

主イエスが十字架の上で口にされたと言われている詩編22編は嘆きの詩編と呼ばれています。2節で「わたしの神よ、わたしの神よ なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救うおうとせず、呻きも言葉も聞いてくださらないのか」と詠い始めた詩人が、「わたしは兄弟たちに御名を語り伝え、集会の中であなたを賛美します。」と22節から23節にかけて、神への賛美に転換します。それは、神のみ恵みによって、私たちの罪の赦しが成就した瞬間でもあります。

ヨハネによる福音書4章14節において、イエス・キリストは、当時のユダヤ教の共同体から排除されていたと思われるサマリアの女に向かって、「わたしが与える水を飲む者は決して乾かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」と語られました。

イエス・キリストが与える水は、その人の内で泉となり、枯れることはないのです。それは、神の真実とも言い換えることができます。流れのほとりに植えられた木の立ち姿とは、信仰という神の真実を蒔かれ、イエス・キリストが与える永遠の命に至る水によって育てられた信仰者の姿そのものであります。この木は、植えられた木と受身形で描かれています。木を植えたお方がいる以上、植えた木について最後まで、その責任を負ってくださるお方がいるということでもあります。

洗礼へと導かれていない方々も、この中には大勢おられると思います。どうぞ、主イエスキリストの招きの言葉に、心の耳をすましていただきたい。そして、この礼拝の中で、「いかに幸いなことか」と私たち罪人を祝福し、「神に従う者の道」へと、真の自由に至る道へと招いてくださるイエス・キリストの罪の赦しの宣言を共に聞きたいと思ひます。

答えのない苦しみ、悲しみ、そして罪ゆえの憎しみ、怒りの中に留まる他はないような私たちの生身の姿があります。そのような私たちを、なお「流れのほとりに植えられた木」として祝福して下さるイエス・キリストの祈りにわが身を委ねながら、ここから一週間の旅路へと出発しましょう。

(記 久保田拓志)